英　　語（リスニング）

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

１　前　　文

令和３年度大学入学共通テスト（以下「本テスト」という。）の「英語（リスニング）」の受験者は，共通テスト⑴・⑵を合わせて476,166人で，受験者全体の約98.3％に当たる。このことは，本テストの実施そのものや，問題の質や難易度，使用される言語材料等が，大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）から引き続き，受験者のみならず，全国の高等学校関係者及び英語教育関係者等，多方面に与える影響が非常に大きいことを意味している。共通テスト⑵の受験者は最終的に1,682人，平均点は55.01点であった。

共通テスト⑵「英語（リスニング）」について検討・評価した項目は，内容・範囲，分量・程度，表現・形式についてである。また評価の視点として，以下の６つの事項を主なよりどころとした。

・　高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編 平成22年５月（以下「学習指導要領」という。）
・　令和３年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針
・　「コミュニケーション英語Ⅰ」,「コミュニケーション英語Ⅱ」,「英語表現Ⅰ」の教科書
・　令和２年度大学入試センター試験「英語（リスニング）」（本試験）
・　令和２年度大学入試センター試験　試験問題評価委員会報告書（本試験）
・　令和３年度大学入学共通テスト⑴「英語（リスニング）」

２　内　容・範　囲

本テストも共通テスト⑴同様,「コミュニケーション英語Ⅰ」,「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「英語表現Ⅰ」の検定教科書等でよく扱われる内容・範囲から出題され，高等学校段階における「聞く力」の領域を中心とした学習の成果を測る適切な問題であった。日常的な話題から社会的な話題に至るまで，語彙や文法の正しい知識を基に，情報活用能力を働かせながら，目的に応じて概要や要点，話者の意図などを捉える必要のある，思考力・判断力・表現力等を問う内容であった。

第１問Ａは，短い英文を聞き，その内容として正しいものを選択肢から選ぶ問題である。日常的な場面設定で英文は平易であるが，発話内容全体と選択肢の正しい理解に基づく思考力・判断力・表現力等が必要である。第１問Ｂは，英文を聞き，その内容と最もよく合う絵を選ぶ問題である。英文自体は平易であるが，語彙や文法の正しい知識を活用しながら，否定語をしっかり聞き取り，英文が表す状況を頭の中で描くことが求められる。

第２問は，男女２人の短い対話を聞いて，質問の答えとして最も適切な絵を選ぶ問題である。受験者になじみのある日常生活における場面での対話を理解し，状況や場所を適切に判断する力が問われている。

第３問は，男女２人の対話を聞いて，書かれている質問の答えとして最も適切なものを選ぶ問題である。受験者になじみのある日常生活を場面としている。対話の場面を想像しながら会話の内容を聞き取りつつ，書かれている質問と選択肢を読み，思考と判断に基づいて解答を選択する，情報活用能力が必要である。

第４問Ａ　問18～21は，やや長めのモノローグを聞き，棒グラフ中のラベルを正しく選ぶ問題である。異なる都市の夏冬の平均気温を比べるグラフは受験者になじみがあると思われる。各都市の夏冬の寒暖差や都市間の比較表現に留意しながら，情報を整理して判断する力が求められる。問22

～25は，やや長めのモノローグを聞き，表を完成させる問題である。海外旅行先でのバスの時刻表が題材であり，話される英文も比較的平易であるが，細部まで正確に聞き取り，情報を整理する力が問われる。第４問Ｂは，４人の発話を聞き，示された条件に最も合うインターン先を選ぶ問題である。示された３つの条件についてそれぞれの情報を正確に理解し，必要に応じてメモを取りながら，条件に合致する選択肢を選ぶ問題で思考力・判断力・表現力等が必要となる。

第５問は，自然科学的な内容を扱った長めの講義を聞き，その概要や要点を捉えてまとめる力が求められる問題である。本テストの目的の一つである，大学での学修に必要な能力を測ることに沿った，高等学校での教科横断的な学びを推奨する問題である。音声が一度しか流れない中，ワークシートの空欄補充や要約など数種類の問題に答える必要があり，高いレベルの思考力・判断力・表現力等が求められる。

第６問Ａは，男女２人のやや長めの対話を聞き，要点と話者の意図を把握する問題である。手書きの手紙とＥメールの特徴についてのやりとりであり，高等学校のディベートの題材としてもなじみのある話題である。解答に必要な情報を整理しながら，発言の趣旨を的確に理解する力が求められる。第６問Ｂは，男性２人，女性２人，合計４人による選挙の投票についての討論を聞き，最終的に投票に行くことに積極的でなかった人の数を答える問題と，４人のうちの１名の意見を最もよく表している図表を選ぶ問題の２問である。若者の投票率についてはニュース等でも取り上げられことがあり，公民の授業やディベートの題材としても受験者になじみがある。討論の流れに留意しながら，的確に話者の意図や要点を聞き取り整理する力が求められる。

３　分　量・程　度

読み上げの回数は２回と１回の混在となり，総マーク数は37となったが，受験者に大きな負荷がかかることはなかった。また，受験者が聞き取る総語数についても，試験の時間に対して適切な分量であった。難易度の高い問題が部分的に含まれていたが，全般的には，学習指導要領において育成することを目指す資質・能力を踏まえた，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが必要となる，標準的で良質な問題が出題されていた。

第１問Ａでは４問が，Ｂでは３問が出題され，受験者に負担がかからない適切な分量と難易度であった。問２は受験者にとってやや難易度が高かったと思われるが，全体的に標準的で取り組みやすい問題が多く，適切な難易度だと言える。

第２問では４問が出題された。それぞれ30語程度の対話であり，１つの対話の中で複数の情報を正確に聞き取るという点でやや難易度が高かった。特に問８では，会話の後の部屋の状態を答えるべきだったが，時間の流れを混同したことによる誤答が多かったと思われる。

第３問は，６問が出題された。それぞれ50語程度の対話であった。流れる音声は１回だが，各対話の前後に長めの時間が設定されていたため，受験者への負担はさほど大きくならなかった。問14については，不定代名詞が指すものの特定に関してやや難しさがあったが，それ以外の問題については標準的な難易度であったと思われる。

第４問Ａ　問18～21では，90語程度のモノローグが出題された。受験者が考える時間もやや長めに設定されており，適切な配慮がなされていた。内容としては問題作成方針に沿った適切なものであったが，都市間だけでなく夏冬の比較の要素もあり，またグラフに適合する都市名を１回聞いて判断するという点でもやや難易度が高かったと思われる。問22～25では，80語程度のモノローグが出題された。細かな部分の聞き取りが必要とされ，特に時刻を計算する問24と25はやや難易度が高かった。第４問Ｂは１人当たり40語程度の，４人によるモノローグが出題された。リード文の後に状況と条件を読む時間が適切に設定されていた。“program”という語がインターンシップ先によって

異なる意味で用いられており，場面に応じた表現の理解力や判断力が要求される問題であったため，やや難易度が高かったと思われる。

第５問では310語程度の講義が出題された。リード文の後及び講義の前半終了後に，それぞれ１分程度の時間が設けられており，受験者が問いや図表を読んだり，解答したりする時間は適切であった。また流れる音声は，実際の講義の場面を想像させるものであった。自然科学的な内容であったため受験者の持つ背景知識の程度に差があったと思われ，また聞き取るべき情報量も多く，難易度は高めであった。

第６問Ａでは170語程度の対話が，Ｂでは200語程度の討論が出題された。リード文の読み上げ後から音声が流れるまでに十分な時間があり，また受験者が考えて解答する時間も適切に設けられていた。第６問Ｂでは，４人の声が容易に識別でき，呼びかけも自然で話者の混同が起こりにくく，適切であった。投票に行くことに対して，どの話者の態度が途中で変わったのかが明示的に表現されており，難易度は普通程度となった。

４　表　現・形　式

イラストや英語の語句，文による多肢選択の設問形式で，説明を聞きながら情報を整理して図表に情報を付加したり，ワークシートにメモを取ったりするなど，高等学校や大学での英語による授業の場面等が適切に設定されていた。第２問から第６問までは，モノローグや対話の場面や状況が日本語で示され，コミュニケーションの場面を想像しやすい配慮がなされていた。選択肢やイラスト，図表，ワークシートも可能な限り分かりやすくシンプルにする工夫がなされていたと言える。使用された英語の表現は，学習指導要領に示された範囲内の表現であり，アメリカ式発音とイギリス式発音，英語を母国語としない話者による読み上げが混在していた。６つの大問は，短いモノローグや対話を２回聞くものから，長めのモノローグや対話を１回のみ聞くものまで，難易度の比較的低いものから高いものへと配列されている一方，基礎的な内容の問題にも３点から４点の配点があり，幅広い受験者層に対応するよう工夫されていた。

第１問Ａのスクリプトと選択肢には平易な表現が使われており，２回聞けるため比較的容易だが，音声的な理解だけでなく状況を判断する力も問う良問であった。問２では，印象に残りやすいonlyやonesに影響されたために，聞き取るべき色や数の情報を誤ったと思われる。第１問Ｂは，状況に合うイラストを選択する問題であり，イラストもおおむね分かりやすかった。しかし，問７のparkのイラストについては森林のようにも見え，カフェを表すイラストに比べて少し分かりにくかったかもしれない。

第２問は，対話の場面が簡潔な日本語で問題用紙に示されており，短い対話の後に流れる質問に合致するイラストを選択する問題である。おおむね，対話の流れからキーワードを聞き取り正答を選択できるよう工夫されていた。問11の集合写真のイラストは，選択肢の番号がイラストの枠外にあったため，その番号がイラストの中の人物を指すことを受験者がすぐに理解できない可能性がある。イラスト全体の中の一部が選択肢となる場合は，イラストの自然さとともに，受験者に分かりやすい表示であることが求められる。

第３問は，対話の場面（簡潔な日本語）と質問（英語）が問題用紙に示されており，対話を聞いて質問の答えを選択肢から選ぶ問題である。音声は一度のみ読まれた。問14では，短い対話の中に複数出てくる不定代名詞を使った色の情報（the black one，that dark green one with the white seats，the other one等）を正確に把握できていなかったことにより誤答につながった可能性がある。問14と問17ではイギリス式発音を使用するなど，音声上の多様性にも富んでいた。

第４問Ａでは，あらかじめ問題文とグラフを読む時間が与えられ，音声は一度のみ流れる。日本

語で書かれた問題文に場面が示され，モノローグを聞きながらグラフに当てはまる都市名や時刻等を選択肢から選ぶ問題である。問18から問21では，都市の夏と冬の平均気温を正しく理解するためにmuch higher than I expected- the highest in fact，much cooler than，a bit coolerといった比較表現を聞き取れるかどうかが鍵となる。モノローグは，グラフのタイトルや選択肢となっている都市名を述べるところから始まり，受験者に聞く準備をさせる配慮がなされていたが，なじみのない都市名が受験者の負荷になった可能性がある。第４問Ｂでは，状況と条件を読む時間が与えられ，音声は一度のみ流れる。状況と条件は日本語で示されており，４人のモノローグを聞いて条件に当てはまる選択肢を選ぶ問題である。「宿泊先が提供される」という内容を“should stay at the dormitory”や“housing is available”など，状況に合った様々な表現で表す工夫がなされている。音声の“while assisting with the program”や“reading programs”を，「コンピューターの知識を生かせること」の条件に合うと誤って判断した受験者が多くいたと思われる。

第５問では，音声は一度のみ流れる。長めのモノローグ（講義）を聞き，ワークシートに付加する情報と概要を把握する問題の後，講義の続きを聞いて，新たに示されたグラフと講義全体の関連を理解する問題が続く。問32までと問33は別々に解答する問題であるかのように見えるが，問33には「講義全体の内容から」と最初のモノローグの理解をも問う指示があり，問33と表をどのタイミングで読んでおくべきか，受験者の混乱を招いた可能性がある。また，自然科学的な内容でorganic carbon，biomass，blue carbon，green carbonといったなじみのない用語の理解に加え，比較的難解な講義の概要や要点を把握せねばならず，かなりの負荷があったのではないかと思われる。問28から問31については，６つの選択肢が配置されているが，受験者が解答しやすくなるような配慮をお願いしたい。

第６問では，音声は一度のみ流れる。第６問Ａは，二人の対話を聞き，発言の意図を捉える問題である。会話の最後の“Speaking of mindful，I wouldn’t mind some chocolate-chip ice cream. ”という表現は，場の雰囲気を和らげるユーモアに富んだ表現で興味深い。第６問Ｂは，４人の意見交換を聞き，最終的に投票に積極的でなかった人数と一人の発言の趣旨を図表から選ぶ問題である。４人の声が識別しやすく，呼びかけや対話の流れも自然で，受験者は意見交換の状況を想像しやすかったと思われる。また，Kenjiが他の学生から説得を受けて，“OK，I’m convinced. We’ve got two hours. Let’s figure out who to vote for!”と発言することにより，直接的に言及しなくても，明示的に「投票に行く」という意思が示されており，受験者は理解しやすかった。

５　ま　　と　　め（総括的な評価）

⑴　共通テスト⑴との比較

共通テストにおいては，難易度や出題量，出題形式の相違が共通テスト⑴と⑵との間で最小限であることが望ましい。総合的に見て，この点においては，共通テスト⑴と⑵のいずれの受験者においても有利または不利な状況が生じるような大きな相違点はなく，釣り合いの取れた問題であった。

⑵　形式等の特徴

本テストにおいては，実施時間は30分のままセンター試験からの変更はなかったが，１問当たりの配点に１～４点の幅を持たせるとともに，読む回数も２回読み（第１問と第２問）と１回読み（第３問～第６問）に分け，満点は100点となった。本テストでは「リーディング」と「リスニング」がともに100点満点で構成されていたことからも，英語４技能のバランスをより意識したものであったと評価する。また設問や場面設定の指示が日本語である点は，測る力を「聞く力」に集約するための措置として有効である。

⑶　学習指導要領との整合性

本テストでは，モノローグ，２人の対話，講義，４人の討論といった様々な状況や場面が設定された。また，イギリス英語や英語を母国語としない話者の音声が取り入れられた。これらの点は，学習指導要領に定める「内容」や「言語材料」に基づき，高等学校の学習指導において留意されるべき事柄が明確に出題に反映されたものであったと評価する。

⑷　高等学校の授業改善への影響

本テストでは，与えられた状況やコミュニケーションの場面における発話から情報を整理し，内容全体から話者の意図等を把握する，思考力・判断力・表現力等を問う出題が多く見られた。

授業では，様々なタイプの英語を聞いたり読んだりする活動はもとより，聞いたり読んだりした内容について話したり書いたりするような活動を十分に行うことにより，話される内容を一度で正確に聞き取る力の伸長が図られる。その意味で本テストは，高等学校の授業では「聞く力」だけに特化した指導ではなく，残りの３技能と統合した言語活動を行うべきというメッセージを持つと思われる。また本テストでイギリス英語や英語を母国語としない話者の音声が含まれたことは大変良い傾向である。インターネット等を活用し，実際のコミュニケーションにおける現代の様々な英語の音声に触れる機会を設けるなど，授業で扱う教材の工夫が必要となるだろう。

発言者の主張を表すグラフを選ぶ設問（第６問の問37）は，高等学校での教科横断型指導や課題探究型指導の充実にもつながる設問であった。英語をアウトプットのツールとして生徒が主体的に使う場面を想定した授業設計や指導の在り方が高等学校の現場に求められていると考える。

⑸　要望・提案

今後とも，日常生活で用いられる自然な表現を採用したり，大学生活等におけるコミュニケーションの場面や話者の多様性を想定したりする一方，受験者の生活環境や居住地区の多様性に配慮した問題を作成していただきたい。また，ジェンダーに配慮した問題作成を継続していただくとともに，受験者の持つ背景知識の程度により，聞き取る内容の理解に大きな差が出ないようにしていただきたい。設問に直接関係しない限り，写真やイラストなど背景知識を補うものがあるとよいだろう。

共通テスト⑵については，大問６の４人の討論の場面は，共通テスト⑴よりも話者を識別しやすかった。これは，声の違いが明確であったことと，明示的に意思が示されていたことによる。このように，姿が見えない話者をより適切に識別できる音声的な工夫と，話者の立場が明確となる表現の工夫を継続していただきたい。

読み上げ回数については，国内外で実施されている英語の試験の多くが１回読みであることから，全て１回読みにして問題数を増やすことで，本テストの妥当性（validity）と信頼性（reliability）を高めることができるかもしれない。しかし，第１問と第２問の２回読みの部分で英語の音声に慣れて解答のリズムができるため，現在の２回読みと１回読みの混在が，受験者にとって解答しやすいものであるとも考えられる。

状況や設問等を読む時間が最初に与えられる問題については，多様な受験者に配慮しながら，黙読時間とどこまであらかじめ目を通すべきかを可能な限り示す工夫をしていただきたい。

出題内容と設問数，配点一覧（*は，全部正解の場合のみ点を与える。）

<table>
<tr><th colspan="4">設問及び出題内容</th><th colspan="2" rowspan="2">設問数</th><th colspan="3">配点</th></tr>
<tr><th>大問</th><th>中問</th><th>小問</th><th>出題内容概要</th><th>小問配点</th><th colspan="2">配点</th></tr>
<tr><td rowspan="2">第１問</td><td>A</td><td>1-3</td><td>モノローグ（短）:状況に合う短文を選択</td><td>4</td><td rowspan="2">7</td><td>4</td><td>16</td><td rowspan="2">25</td></tr>
<tr><td>B</td><td>4-7</td><td>モノローグ（短）：状況に合うイラストを選択</td><td>3</td><td>3</td><td>9</td></tr>
<tr><td>第２問</td><td></td><td>8-11</td><td>対話（短）：対話後の質問に合うイラストを選択</td><td>4</td><td>4</td><td>4</td><td>16</td><td>16</td></tr>
<tr><td>第３問</td><td></td><td>12-17</td><td>対話（短）：印字された質問に合う答えを選択</td><td>6</td><td>6</td><td>3</td><td>18</td><td>18</td></tr>
<tr><td rowspan="3">第４問</td><td>A</td><td>18-21</td><td rowspan="2">モノローグ（中）：グラフと表への情報付加</td><td>4</td><td rowspan="3">9</td><td>4＊</td><td>4</td><td rowspan="3">12</td></tr>
<tr><td>A</td><td>22-25</td><td>4</td><td>1</td><td>4</td></tr>
<tr><td>B</td><td>26</td><td>モノローグ（中）：４人のモノローグを聞き状況と条件に合う答えを選択</td><td>1</td><td>4</td><td>4</td></tr>
<tr><td rowspan="5">第５問</td><td rowspan="5"></td><td>27</td><td rowspan="5">モノローグ（長）：講義を聞き，ワークシートへの情報付加，要約選択</td><td>1</td><td rowspan="5">7</td><td>3</td><td>3</td><td rowspan="5">15</td></tr>
<tr><td>28-29</td><td>2</td><td>2＊</td><td rowspan="2">4</td></tr>
<tr><td>30-31</td><td>2</td><td>2＊</td></tr>
<tr><td>32</td><td>1</td><td>4</td><td>4</td></tr>
<tr><td>33</td><td>1</td><td>4</td><td>4</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第６問</td><td>A</td><td>34-35</td><td>対話（長）：対話を聞き要約選択，応答選択</td><td>2</td><td rowspan="2">4</td><td>3</td><td>6</td><td rowspan="2">14</td></tr>
<tr><td>B</td><td>36-37</td><td>対話（長）：４人によるディスカッションを聞き賛否数，意見を表す図を選択</td><td>2</td><td>4</td><td>8</td></tr>
<tr><td colspan="6">共通テスト⑵平均点 55.01点</td><td colspan="2">37</td><td colspan="3">100</td></tr>
</table>

第２　教育研究団体の意見・評価

○　全国英語教育研究団体連合会

（代表者　鈴木　真人　　会員数　約60,000人）
ＴＥＬ　03-3267-8583

１　前　　文

1990年から2020年まで実施された「大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）」が廃止され，2021年より「大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）」が新たに開始された。外国語〔英語〕については，幾つかの変更点があった。

従来の「筆記」が「リーディング」に変更され，配点も200点から100点となり，さらに「発音，アクセント，語句整序などを単独で問う問題は作成しない」など出題内容についても変更があった。「リスニング」については名称の変更はなかったが，配点が50点から100点へと倍増し，「多様な話者による現代の標準的な英語を使用する」という観点から「イギリス英語」も使用され，さらに「１回読み」問題が導入されるなど内容的な変更があった。「知識の理解の質を問う問題や，思考力，判断力，表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視する」という共通テストの出題方針が色濃く反映されたものとなり，形式・内容ともにこれまでのセンター試験とは大きく変わっている。2回の試行調査が実施されたものの，初めての試験形式に臨んだ受験者たちの不安や緊張感は察するに余りある。今後も，必要な情報を迅速に丁寧に開示していただくことを切に希望する。

高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）では「実践的コミュニケーションの育成」に重点が置かれ，高等学校にける英語教育においては，「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと」の４技能を総合的に採り入れた授業形態が一般に進みつつある。また，現行の学習指導要領下では「英語で授業を進める」ことが明文化され，今までより一層「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」が重視される教育課程や授業が期待されている。この実践的な英語教育を推進する大きな流れの中で，センター試験へのリスニング・テスト導入が実現して15年が経過し，様々な困難を乗り越えて，今年度より共通テストの「リスニング」として新たなスタートを切ったことは，わが国の英語教育の未来にとって大きな出来事である。

大きな課題として記すべきは，今年度の稼働が予定されていた「大学入試英語成績提供システム」導入の見送りである。今般の共通テストにおいては４技能のうち「読むこと」「聞くこと」のみを問うており，平成29年７月に示された「大学入学共通テスト実施方針」における「高等学校学習指導要領における英語教育の抜本改革を踏まえ，大学入学者選抜においても，「読む」「聞く」「話す」「書く」の４技能を適切に評価する」という方向性が確立されているという状況にはなく，早急に方向性が示されることが必要である。グローバル人材の育成を目指した英語教育改革が進む機運を減じることなく，さらに加速させていくものとしてもらいたい。

2021年度の共通テスト利用大学・短期大学は，前年度センター試験時から９校増の866校と過去最多となった。内訳は，国立大学が82校，公立大学が91校，私立大学が533校，公立短期大学が13校，私立短期大学が142校，公立専門職大学が１校，私立専門職大学が４校である。今後も利用が進んでいくことが予想される。受験者数は共通テスト⑴（１月16，17日）が482,546人で，共通テスト⑵（１月30，31日）が2025人であり，総受験者数は484,114人で前年度の527,072人から約８パーセントの減少となった。「英語（リーディング）」受験者数（昨年は筆記）は477,868人（前年度518,579人）であり，「英語（リスニング）」受験者数は476,167人（前年度512,181人）であった。リーディング

は全受験者数の約99パーセント，リスニングは約98パーセントが受験しており，英語の成績が文系理系を問わず全ての受験者の大学合否に大きく関与している。

平均点*は，一昨年度が31.42点（100点換算で62.84点），昨年度は28.78点（100点換算で57.56点）今年度の平均点は56.16点であり，前年度より－1.4点と僅かに下がったものの，ほぼ横ばいということができる。平均点と難易度は直結するものではないが，難易度についてもほぼ前年度並みであったと言える。（＊平均点は共通テスト⑴の数値）

読み上げられた英語の総語数は約1,550語（昨年度は約1,110語）で大幅に増加し，設問と選択肢の総語数は約700語（昨年は約570語）で，こちらも増加となった。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等

試験問題の構成は大きく次のようなものであった。

大問	配点	マーク数	出題内容	読み上げ回数
1	25	4	A:短文内容一致問題	2
		3	B:短文イラスト問題	
2	16	4	対話文イラスト問題	2
3	18	6	対話文選択問題	1
4	12	8	A:モノローグ図表完成問題	1
		1	B:複数のモノローグ選択問題	
5	15	7	講義内容選択問題	1
6	14	2	A:２者対話文選択問題	1
		2	B:４者対話文選択問題	
合計	100	37		

大問数は昨年の４問に対して６問となり，マーク数は12増えて37となった。配点も昨年の倍の100点である。また，第３問以降の読み上げ回数が１回になり，センター試験と大きく変化した部分でもある。

第１問　短い発話を聴いて，内容に関する選択肢を選ぶ問いである。Ａは短い発話を聴き取り，設問の問いに最も適する選択肢を選ぶ問題。状況を要約したり，発話のやり取りから導くことのできることを判断したりする力が求められた。Bでは短い発話を聴いて，設問で求められる内容に合致する絵を選ぶ問題であり，内容を正確に把握する力が問われた。難易度としては標準レベルであり，設定も日常的なものであり，短い発話から状況や情景を把握させ，絵という視覚情報を選択させるという設問形式は好ましいものである。ただし，短い発話であるため，やや唐突に始まる印象がある。最初の問題はできるだけイメージしやすい設定の問題から初めて，徐々に英語に耳を慣らしていくような流れが望ましい。

問１　「クラブの会議が何時に始まるか？」という発話を，The speakerを主語として客観的に説明する文章を選ぶ問題。

問２　どのネクタイをするかについて話す話者の意図をくみ取る問題。

問３　「Kevinのeメールアドレスを教えてください」という発話を，The speakerを主語として客観的に説明する文章を選ぶ問題。

問４　「誕生日ケーキをまた包装していないのでパーティーに遅れる」という発話を，The speakerを主語として客観的に説明する文章を選ぶ問題。

問５　「泳ぐことはできるがキャンプやバーベキューはできない」という内容を示す絵を選ぶ問題。

問６　シェフがウエイターに両方の料理のお皿を運ぶように指示している内容に合致する絵を選ぶ問題。

問７　公演はカフェよりも駅から離れていないという内容に合致する絵を選ぶ問題。

第２問　短い対話を聴き，設問に合致するイラストを選ぶ問題。日本語で示されている場面の情報を把握し，聴いた内容から適切なイラストを選ぶという複合的な作業を求めている。これまでにもあった形式ではあるが，設問に示されている日本語の情報把握が重要であるため，今後受験者はこの形式に慣れておく必要がある。短い時間の中で，複合的な作業を素早く行うことを要求しているため，与えられる状況は日常生活に根差している事柄や，現代的なテーマを用いることによって，受験者にイメージしやすいものが設問とされることが望ましい。難易度としては標準レベルであるが，イラストの設定については，思考に不必要な負担をかけることのないように，今後も工夫されることを期待する。

問８　部屋の片づけについて女性が指示している内容を把握し，それに合致するイラストを選択させる問題。

問９　宿泊場所についての男女のやり取りを聞き，会話の内容に適合する宿泊場所の位置を選択する問題。問８で求めている力と同種の問題。両問ともテーマは適切である。場面設定や設問内容は適切ではあるが，イラストにおけるショッピングモールや公園のピクトグラムを瞬時に判断する必要があったため，戸惑った受験者もいたかもしれない。聴解とは離れたところでの思考が負担になることは望ましくないため，その点は今後も御配慮いただきたい。

問10　男性が求めているランチセットのイラストを選ぶ問題。やや平易な問題である。

問11　写真における人物の位置関係を人物描写をとおして理解し，人物を特定する問題。

第３問　短い対話を聴き，設問に合致する最も適切な選択肢を選ぶ問題。第２問と同様に，日本語で示されている場面の情報を把握し，概要や要点を目的に応じて把握する力が問われている。またこの問いでは，出題方針で予告されていた「イギリス英語」が使用されている。短い対話を聴き，設問に合致するイラストを選ぶ問題。日本語で示されている場面の情報を把握し，聴いた内容から適切なイラストを選ぶという複合的な作業を求めている。「多様な話者による現代の標準的な英語」を使用するという点で，新傾向は好ましいものであると考えるが，アメリカ英語でのやり取りが続いている中で，唐突に始まってしまうと受験者にも戸惑いが生じる。共通テスト⑴では「イギリスにいる弟」という設定であるが，こういった形を含めて受験者が取り組みやすい状況を作っていただけるとありがたい。さらに第３問以降は「１回読み」ということもあるため，聴解力を問う問題としてさらに慎重な問題作成をお願いしたい。

問12　友人同士が将来のことについて話し合う対話。

問13　誤ってブログに掲載した写真が実際は削除されていなかったと友人に告げられる対話。テーマとして同時代的であり，好ましい設問である。

問14　夫婦が車販売店で車を選んでいる場面でのやり取りで，アメリカ英語とは異なるアクセントの英語が使用されている。今回の「イギリス英語を使用する」という方針を反映したものであるが，新しい傾向の出題に戸惑った受験者もいたかもしれない。共通テスト⑴では「イギリスに住む弟が日本にいる姉に電話をしている場面」であるため，ある程度の必然性を感じることができるが，本問はある意味で唐突にイギリス英語が登場したことに戸惑いを感じた受験者もいるかもしれない。設定は難しいかもしれないが，共通テスト⑴のように設問である程度予見できるような配慮があるとよいと思われる。

問15　久しぶりに再会した友人との対話。for agesという表現の理解が必要である。

問16　大学生が授業で使うテキストについての対話。

問17　男性がホテルの従業員に延泊について相談をしている対話。問15と同様にここでもアメリカ英語とは異なるアクセントの英語が使用されている。多様な話者による現代の標準的な英語の理解を求める傾向は好ましいものであるが，それらが使用される設定や必然性について，受験者が唐突な印象を受けることなく問題に取り組むことのできるように，さらに御考慮いただきたい。

第４問　Ａは読まれる説明を聴き，図表を見ながら空所を埋めていく問題。数字や数についてメモを取って聴き取る力が問われている。Ｂでは，４人の話者の説明を聴き，設問に合致する選択肢を選ぶ問題。複数の情報を聴き，情報を比較しながら思考する力が問われている。聴き取った内容と資料を結び付けて考えさせる問題は，日々の授業運営にも影響を与えるものとして望ましいと考えているが，解答にはある程度の時間がかかることも確認されたい。問題文と図表を読む時間は与えられているが，聴いた内容から設問に取り組む時間はやや短い。聴いているうちにどの人の発言だか分からなくなった，せっかく聴きとれても，正解にたどり着かなかったという受験者の声も聞こえてきている。上にも述べたとおり，聴解力とは異なる点で受験者に負荷をかけすぎる出題は再考いただきたい。また，出題の方向性は好ましいものであるので，解答時間についてさらに検討をお願いしたい。

問18～21　「北アメリカの４都市の平均気温」についての先生の講義を聞いてグラフや表を完成させる問題。

問22～25　「海外旅行中に，バスターミナルでバスの時刻表の変更についての説明を聞く場面」でのやり取りを聴き，表を完成させる問題。最後に付加される，活用できる表があるものの，４種類のバス路線についての説明を１回読みで整理するのは難しいと感じた受験者はいたと思われる。

問26　夏休みのインターンシップ先を決めるために，４人の話者の説明を聴きとる問題。示されている表を活用することを前提としている部分については，望ましい設定であると考えられる。

第５問　「アメリカの大学で，生態系の保全」についての講義を聴き，設問に合致する最も適切な選択肢を選ぶ問題。ワークシートとして示されているものを活用して，ノートテーキングをすることが必要になる。聴き取った内容とグラフから読み取れる情報を組み合わせて要点を把握する複合的な作業を必要とする。日々の授業運営にも影響を与えるものとして望ましい出題であるが，前問と同様に，問題文と図表を読む時間は与えられているが，聴いた内容から設問に取り組む時間はやや短い。せっかく聴き取れても，正解にたどり着かなかったという受験者の声も聞こえてきており，その点は再考をお願いしたい。

問27～32　ワークシートに入るべき事項を選択肢から選ぶ問題と講義の内容を選択させる問題。１回読みであるため，情報の処理時間及び解答行動に時間を要し，次の設問への十分な準備が難しかったと思われる。

問33　図から読み取れる情報と講義全体の内容から言えることを選択する問題。“blue carbon”という受験者にはイメージしにくいテーマであり，語彙も一定の難易度があるため解答に苦労した受験者もいるかもしれない。前述のように設問に十分対応する時間があったかどうかについて再考をお願いしたい。

第６問　Ａは２人の会話を聴き，設問に合致する最も適切な選択肢を選ぶ問題。話者の発話の要点を把握する力が問われている。Ｂは４者の会話を聴き取り，設問に合致する最も適切な選択

肢を選ぶ問題。それぞれの話者の賛否の立場を正確に把握し，意見に合う図表を判断する力が問われた。問題の方向性としては好ましいが，４者の会話において「誰が話しているか」を把握することが難しかった。名前を呼びかけているため，話者の特定は可能だが，一定の長さの会話文であるため誰が話しているかを把握し続けるのを難しく感じた生徒が少なくないと思われる。前問と同様に，せっかく聴き取れても，正解にたどり着かなかったという受験者の声も聞こえてきており，その点は再考をお願いしたい。

問34～35　日本語で書かれた状況を踏まえて，話者の主張の要点と合致する選択肢を選ぶ問題。

問36　４人の話者のうち，選挙の投票に行くことに積極的ではなかった人の数を問う問題。

問37　会話の内容を踏まえて，ある話者の意見を反映している表を選択する問題。

３　ま　と　め

「大学入学共通テスト問題作成方針」に示されているように,「高等学校教育の指導のねらいとする力や大学教育の入り口段階で共通に求められる力を踏まえたものとなるよう，出題教科・科目において問いたい思考力，判断力，表現力を明確にした上で問題を作成する」という方向性は今回の共通テストにおいて明らかに反映されている。こういった傾向は望ましいものであり，教育現場での授業改善にも確実に繋がっていくものであると評価したい。ただし，思考力を問うことが目的でありながら，結果的に情報を処理する能力や，さらにそれを速く行うことを求めるような問題設定となってしまうことは避けるべきである。今年度の問題では，結果的に情報を整理させる要素が強い設問や，設問間の時間が十分に取れないことによって思考する時間を確保するのが難しい設問，場面設定により話者の特定に苦労する，といった設問もあった。１回聴き取った内容について複数の資料を読み解く点で受験者への負荷は高まっている。より基本的な聴解力が身についているのかを評価するような問題作成もお願いしたい。「知識・技能」を十分有しているかの評価も行いつつ，思考力・判断力・表現力等を中心に評価する試験問題の作成に当たっては大変な御苦労があるものと推察するが，これまでのセンター試験における問題評価・改善の蓄積を生かしながら，受験者の学びの動機をさらに高める性質の作問をお願いしたい。グローバル人材の育成を目指した英語教育改革の方向性の中で学習指導要領に示す４技能のバランスの良い育成が求められている背景を踏まえ，受験者が身につけるべき資質・能力を育成できるように，主体的な学びを促進する試験が安定的に作成されることを希望する。

第３　問題作成部会の見解

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　高等学校学習指導要領では，外国語の音声や語彙，表現，文法，言語の働きなどの知識を，実際のコミュニケーションにおいて，目的や場面，状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにすることを目標としていることを踏まえて，４技能のうち「読むこと」「聞くこと」の中でこれらの知識が活用できるかを評価する。したがって，発音，アクセント，語句整序などを単独で問う問題は作成しないこととする。

○　「リーディング」「リスニング」ともに，ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に，各CEFRレベルにふさわしいテクスト作成と設問設定を行うことで，A1からB1レベルに相当する問題を作成する。また，実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面，状況の設定を重視する。

○　「リーディング」については，様々なテクストから概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問うことをねらいとする。

○　「リスニング」については，生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について，概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問うことをねらいとする。音声については，多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。

　読み上げ回数については，英語の試行調査の結果や資格・検定試験におけるリスニング試験の一般的な在り方を踏まえ，問題の数の充実を図ることによりテストの信頼性が更に向上することを目的として，１回読みを含める。十分な読み上げ時間を確保し，重要な情報は形を変えて複数回言及するなど，自然なコミュニケーションに近い英語の問題を含めて検討する。全ての問題を１回読みにする可能性についても今後検証しつつ，当面は１回読みと２回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。

○　グローバル人材の育成を目指した英語教育改革の方向性の中で高等学校学習指導要領に示す４技能のバランスの良い育成が求められていることを踏まえ，「リーディング」と「リスニング」の配点を均等とする。ただし，各大学の入学者選抜において，具体的にどの技能にどの程度の比重を置くかについては，４技能を総合的に評価するよう努めるという「大学入学共通テスト実施方針」（平成29年７月）を踏まえた各大学の判断となる。

２　各問題の出題意図と解答結果

・第１問は，英語の特徴やきまりに関する知識・技能（特に文構造及び文法事項）に基づき，身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い発話を聞いて，必要な情報や，発話内容の概要や要点を把握する力を問う。日常的な内容の文を聞いて，内容が合っている選択肢（セクションＡでは文，セクションＢではイラスト）を選ぶ問題である。

　第１問の正答率はおおむね高かったが，問２の正答率はあまり高くなかった。この問いでは，I only have blue ones. という文の個別の語彙は聞き取れていても，only haveやonesを正しく解釈できず，意味を正確に理解するための実践的な文法力において弱い傾向が見てとれた。

・第２問は，身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を，場面の情報とイラストを参考にしながら 聞き取ることを通じて，必要な情報を把握する力を問う。日常的な短い対話を聞いて，設問に対する答えをイラストから選ぶ問題である。

　本テストにおいては，得点率が最も高かった大問である。文脈が与えられ，対話の中で必要な情報が分散して示されていること，また選択肢がイラストであることがその主な理由であると考

えられる。

・第３問は，身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を，場面の情報を参考にしながら聞き取ることを通じて，概要や要点を目的に応じて把握する力を問う。日常的な対話を聞いて，対話内容に関する設問の答えとなる選択肢を選ぶ問題である。対話は言語の機能（例：依頼，誘い，感謝等）を軸に作られており，小問６題のうち，今回は問14と問17をイギリス英語による発音とした。

第３問全体の得点率は共通テスト⑴の試験と比べるとやや低かったが，その原因の一つは問14の正答率の低さにある。ここでは，that one/the other oneといった代名詞がどの対象を指すのか，文脈から正しく判断する力が問われたが，その点を難しく感じた受験者が多かったようである。

・第４問Ａは，必要な情報を聞き取り，図表を完成させたり，分類や並べ替えをしたりすることを通じて，話し手の意図を把握する力を問う。ここでは，北米にある４つの都市の気温を示したグラフに関する説明を聞き，ワークシートを完成させる設問と，バスの時刻表の変更についての指示を聞き，変更を加える設問から成る。

バスの時刻表の設問は正答率がやや低かったが，これはon timeやcanceledなどの単純な情報は比較的よく聴解できるものの，数字の聞き取りなどの詳細情報の聴解や，路線の変更による到着時刻の変更などの複合的な情報の理解となると，難しく感じる受験者が多かったからだと考えられる。

第４問Ｂは，複数の情報を聞き，最も条件に合う選択肢を一つ選ぶことを通じて，状況・条件に基づき比較して判断する力を問う。ここでは，複数のインターンシップ先の説明を聞き，最も希望に合うインターンシップ先を一つ決める。４人の話者のうち，一人はイギリス英語，一人は日本人英語の発音とした。

この設問は，特に成績上位層の識別に有効であった。共通テスト⑴の試験よりも正答率が低かった原因の一つとして，reading programなどをコンピューターのプログラムと誤解した受験者が一定数いたからだと推測される。

・第５問は，身近な話題や知識のある社会的な話題に関する講義を聞き，メモを取ることを通じて概要や要点を捉える力や，聞き取った情報と図表から読み取れる情報を組み合わせて判断する力を問う。ここでは，生態系の保全についての講義を聞く。講義を聞いて，内容理解・情報整理・論点把握をし，更に講義内容と図表情報の統合をすることが求められている。

第５問についても共通テスト⑴の試験と比べて得点率が低かった。これは講義がblue carbonという比較的なじみの薄い理系のテーマを扱った内容であったことが影響したからだと思われる。とは言え，特に上位層の受験者間の力の差を識別することができている。

・第６問Ａは，身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き，話者の発話の要点を選ぶことを通じて，必要な情報を把握する力や，それらの情報を統合して要点を整理し，判断する力を問う。ここでは，手紙を書くことについて意見交換をする二人の会話を聞いて，会話の趣旨を判断する。

第６問Ｂは，身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き，それぞれの話者の立場を判断し，意見を支持する図表を選ぶことを通じて，必要な情報を把握する力や，それらの情報を統合して要点を整理し，判断する力を問う。ここでは，４人の学生が選挙の投票に行くことについて意見交換している様子を聞き，話者の立場を判断する。

第６問は共通テスト⑴の試験と比べて得点率が高かった。セクションＡでは手書きの手紙の是非を議論するというトピックがなじみやすく分かりやすかったこと，セクションＢでは４人の話者の区別がつきやすく，話者の一人であるHelenの意見を表している図表を正しく選べた受験者が

多かったことが理由として挙げられる。一方で投票に積極的でなかった者の人数を選ぶ問36は，会話冒頭では誰に投票すべきか態度が曖昧だった話者が，会話の最後では投票に積極的になったことを正確に聞き取れず，積極性がないと誤解した受験者が多かった可能性が考えられる。

3　出題に対する反響・意見等についての見解

本テストについて，教育研究団体からは「知識の理解の質を問う問題や，思考力，判断力，表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視する」という大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）の問題作成方針が色濃く反映されたものであり，出題教科・科目において問いたい思考力，判断力，表現力を明確にした上で問題を作成する」という方向性が明らかである点。そしてこういった傾向は望ましく，教育現場での授業改善にも確実に繋がっていくものである点が評価された。

また，高等学校教科担当教員からは，出題内容・範囲，問題の分量・程度，及び表現・形式についておおむね適切であったとの総評と併せて，本テストの特徴として，読まれた内容を構成するパーツとしての単語や表現をよりどころとして正解を選ぶタイプの出題ではなく，与えられた状況や場面において発せられた内容全体から話者の意図や要点を見極めて情報を整理し正解を選ぶ，思考力・判断力・表現力等を問う出題が多いことが挙げられた。

一方で，出題に関して幾つかの指摘もあったが，以下主な意見とそれに対する問題作成部会としての見解及び対応を述べる。

・第１問については，短い発話であるため，やや唐突に始まる印象があるとの指摘を受けた。これについては本テストを通じて，なるべく難易度の低い小問から徐々に難易度が上がっていくよう工夫をしているが，今後もなるべくイメージしやすい設定の内容から初め，徐々に英語に耳を慣らしていける流れを作る方針を継続したい。

・第２問については，イラストやピクトグラムを分かりやすいものとなるよう，引き続き配慮して欲しいとの意見があり，この点については今後も慎重に取り組みたい。

・第３問については，アメリカ英語でのやりとりが続いている中で，唐突にイギリス英語の会話が始まることに対して受験者に戸惑いが生じる可能性があることが指摘された。この点に関しては，今後も状況設定の工夫をするなど，なるべく受験者が取り組みやすいよう留意したい。

・第４問～第６問については，聴いた内容から設問に取り組む時間はやや短いとの指摘を受けた。この点については，30分という限られた試験時間内に，いかに多くの設問を含めて信頼性を上げつつ，問題の状況設定や解答に求められている情報を明確に示すか，バランスを意識して問題作成を続けたい。

・第５問では受験者の背景知識の有無により理解内容に差が出ないように，との指摘を受けた。いかなるテーマを選択しても，必ず背景知識の量には個人差があるが，背景知識があってもきちんと聞かないと解けない問題と，背景知識がなくてもそれを補う工夫をした問題の作成を今後も目指すこととする。

・第６問Ｂでは，４人の話者の区別がつきやすいよう，話者の声質に留意するといった録音時の配慮に加え，会話の最初から４人全員が一斉に登場しないようにする，あるいは話者の役割が明確な場面設定をするといったスクリプト作成上の工夫をするよう，引き続き配慮する。

この他，全体的なこととして，受験者の生活環境や居住地区で差が出ないような問題作成やジェンダーに配慮した問題作成についても継続すべきとの要望があった。読み上げ回数については，国内外で実施されている英語の試験の多くが１回読みを採用しているので，全て１回読みにして問題数を増やすことで，本テストの信頼性と妥当性を高めることができるかもしれないという提案があ

った一方で，２回読みと１回読みの混在であっても，第１問・第２問の２回読みで受験者が英語の音声に慣れてから第３問以降の１回読みに入る流れがあり，受験者の緊張を解す効果があるかもしれないとの意見もあった。また，英語変種の導入に関しては，国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態を反映しており，大変良い傾向であると評価された。

４　ま　と　め

本テストの平均点は55.01点で，共通テスト⑴と比べて若干低く，点数にもややばらつきがあったが，センター試験の平均点と大きく異なることはなかった。共通テストでは問題の種類と数が増え，難易度も上がったと考えられることから，受験者が４技能の学習を強化した結果，リスニング力が全体的に向上した可能性が示唆される。

本テストは，センター試験に比べ，より４技能のバランスを意識し，場面設定などを日本語で表記することで，測る力を「聞く力」に集約する措置をとった。また，モノローグ，対話，講義，４人の討論といった様々な場面や状況を設定し，高等学校学習指導要領の方針を汲んだものとした。英語の多様化についても一定程度体現化できたと考える。こうした方向性については，今後も継続していきたい。

共通テストが高等学校の授業改善へ及ぼす影響については，高等学校教科担当教員からも示された。英語をコミュニケーションのツールとして使う場合を想定し，生徒自らがそれを体験するような授業設計や指導の在り方を追求すべきであるとの見解は，まさに問題作成部会の意図したことと一致する。

また，教育研究団体からの指摘のとおり，思考力・判断力・表現力等を問うことが目的でありながら，情報処理能力や，それを速く行うことだけを求めるような問題設定となってしまうことは避けるべきであるが，一方で本物のコミュニケーションの場で求められる即時的な対応力は，聴解力の基本として位置付けるべきであると考える。受験者に過度の負担を与えることは避けつつ，聞き取ったことを瞬時に「理解・解釈」できるリスニングの流暢性を高める学習にも是非力を入れてほしい。共通テストが今後も，「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」につながる波及効果があるものとなるよう心したい。